

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

多可のあまんじゃく
夜明けに逃げ出すあわてもの

篠ヶ峰の鬼
のんきな鬼のお手伝い

伝説

多可のあまんじゃく
夜明けに逃げ出すあわてもの
篠ヶ峰の鬼
のんきな鬼のお手伝い

紀行

山に棲む鬼
・『播磨国風土記』の巨人伝説
・笠形山を登る
・多可町を訪ねる
・天の邪鬼とダイダラボッチ
・篠ヶ峰の鬼

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

多可のあまんじゃく 夜明けに逃げ出すあわてもの

神崎郡市川町（かんざきぐんいちかわちょう）の東、多可郡多可町（たかぐんたかちょう）との境に、笠形山（かさがたやま）というきれいな姿をした山があります。むかしむかし、この山には「あまんじゃく」という名前の、ものすごい力持ちで、体の大きないたずらものが住んでいました。

あまんじゃくは、一度でいいから山の主になってみたいと思って、山の神様に力くらべをしようと持ちかけました。あわてものあまんじゃくは、山の神様がまだ返事をしないうちにひとり決めしてしまって、「わしは一晚のうちに多可郡の妙見山（みょうけんさん）まで石の橋をかけてやるんじゃ。」と言って、さっそく作りはじめました。

あまんじゃくは大急ぎで近所の山からたくさんの石を集めました。しかし、橋の脚（あし）にしようと大きな石の柱を立てたところで、「コッケコッコウー！」と一番鶏（いちばんどり）の聲がしてしまいました。お日さまの苦手なあまんじゃくは、そのまま大あわてで逃げ出しました。

このときあまんじゃくが立てたという石の柱が、いまでも笠形山の山頂近くに残っています。また、このあたりには石の板がたくさんころがっていますが、これもあまんじゃくが橋の板にするために集めたものだと言われています。

このあまんじゃく、多可郡では、ずっと南の明石（あかし）の方からやってきたと伝えられています。明石からずっときゅうくつそうに身をかがめてきたあまんじゃくは、多可郡までやってくると背をのぼして楽々と歩けるようになりました。そこで思わず、「ここは高いなあ。」と言ったので、この土地を「多可郡」と呼ぶようになったと言われています。

またある時、いつものいたずら心をおこしたあまんじゃくは、笠形山の岩を縄（なわ）で引きずりおろして運びはじめました。多可町の北の方から加美区（かみく）、八千代区（やちよく）を通過して、中区靴屋（なかくこうじや）まできたところで夜が明けてしまったので、そのまま逃げ帰ったと言われています。

さらにある時は、多可の谷の奥から全部の田にお供えを配って歩き、中区曾我井（なかくそがい）まできたところで夜が明けてしまったので、またもや逃げ帰ったとされています。おっちょこちょいで、どこかにくめない、そんなあまんじゃくのお話です。

（『郷土の民話』中播編、東播編をもとに作成）

伝説

篠ヶ峰の鬼 のんきな鬼のお手伝い

丹波市（たんばし）と多可郡多可町（たかぐんたかちょう）との境にそびえる篠ヶ峰（ささがみね）。この山には古くから鬼が住みついていた。ある日、このあたりを大きな嵐（あらし）が吹きすさびました。

やがて嵐が収まり、鬼がふと山の下を見ると、山すその牧山（まきやま）の里で人々があわただしく動き回っています。

「おやおや、滝つぼから水があふれて、里は水びたしじゃ。何とかしてやらにゃあいかんのう。」

鬼は川の水がどんどん落ちていく滝つぼに口をあて、「ぶうーっ。」と息を吹きこみました。すると不思議、滝つぼからあふれかえていた水は、見る見るうちに地下へ吸いこまれていきました。

これで牧山の里は水難から救われたのですが、地下にもぐった水は行き場を失い、東の船城（ふなき）の里へふき出してしまいました。船城の里は一面の水びたし、沼になってしまったのですが、のんきな鬼はそれを知りません。

「あー、いいことをした。人助けは気持ちがいいなあ。」

山の上へ帰った鬼は、ニコニコと牧山の里の人たちの楽しそうな姿をながめているのでした。

ところが、うまくいかないものです。こんどは日照りがやってきました。鬼が滝の水を地下に吹きこんでしまい、流れてくる川の水が少なくなっていたので、牧山の里では田畠へ回す水が足りなくなっていました。人々は急いで地面を掘り返して水がわいてくるところを探しています。

「しまった、しまった。わしの失敗じゃ。すぐに何とかしないと。」

またまた里へ降り立った鬼は、指で地面を一かき二かき。たくさんの井戸を作って、水が少なくても育つ栗（くり）や桑（くわ）をいっぱい植えていきました。

「こりゃ楽しい。どんどん増やしてやろう。」

つぎつぎと植わっていくようすに気分をよくした鬼は、牧山の里だけではなく、東の小川（おがわ）の里や久下（くげ）の里まで栗や桑を植えてまわりました。

伝説

篠ヶ峰の鬼 のんきな鬼のお手伝い

「あー、いい気持ちじゃわい。」

山の上へ帰った鬼は、満足げに下界をながめていました。ところがちょっと東の空へ遊びに行ってみると、船城の里が水びたしになっているのが見えます。人々は山から木を切り出して沼にしずめ、それを足場にしながら泥まみれで深田の稲（いね）を育てています。

「うーん、大変そうだなあ。よし、こっちも手伝ってやろう。」

鬼は植えたばかりの牧山の里の栗を間引いて、船城の里の沼に放りこみました。じつは張りきりすぎてすこしばかり栗を植えすぎていたのです。ちょうど良く間引かれた牧山の栗は大きな実をみのらせるようになり、船城の里の沼は浅くなって、豊かな水田が開かれていきました。

「さあ、もうこのくらいでいいだろう。」

鬼は天から与えられた二千年の命がつきようとしているのを知っていました。とうとうおむかえが来た日、鬼は名残りおしそうに牧山の里を見わたしながら、白い雲をちぎって里に投げ落としました。雲はふっくらとした蚕（かいこ）になって、きれいなまゆを作りました。里の人たちは、鬼が植えてくれた桑の葉をたっぷりと与え、たくさんの蚕を育てました。

「ついでに、こっちにも何かあげておかないと。」

鬼はへそをちぎって船城の里に投げ落としました。大きな鬼のへそは、田んぼの水の中に入るとくるくる回って、大きなタニシになりました。

こうして牧山の里は栗と蚕、船城の里はタニシの名産地となり、人々は豊かに暮らせるようになったのです。

（『郷土の民話』丹有編、『兵庫の伝説』第一集をもとに作成）

紀行

山に棲む鬼

『播磨国風土記』の巨人伝説

播磨の北部、多可郡多可町（たかぐんたかちょう）は四方を山に囲まれている。そうした山国に伝わった伝説が「天の邪鬼（あまのじゃく）」伝説である。多可では、「あまんじゃく」、あるいは「あまんじゃこ」と呼んでいるこの妖怪、役に立つのかどうかもわからないことをいろいろとしようとして、結局しくじってばかりという、かなりおちょこちょいな話が伝わっている。

ただし、この話の中にはかなり古い要素も含まれている。8世紀初めにできた『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では、多可郡の地名伝説としてつぎのような記述が見られる。



多可町加美区の山並み

むかし、巨人がいて、常に背をかがめて歩いていた。南の海から北の海へ、東から西へと巡り歩いているうちに、多可郡にたどりついた。巨人は「ほかのところは低いので、ずっと背をかがめていなければならなかった。でも、ここは高いので背が伸ばせる。ああ、高いなあ」と言った。それで、この地域を多可郡と言うのである。巨人の歩いた足跡は、たくさん沼になっている。

このサイトで紹介した伝説の冒頭部分は、この『風土記』の伝説とよく似ている。播磨の場合、『風土記』や中世の歴史書である『峰相記（みねあいき）』が残っているため、伝説の古いかたちがわかる場合が少なくない。この伝説も、古代に源をもち、時代を超えて語りつがれてきた話であることがわかる事例である。ただし、今日伝わっている伝説では、主人公が巨人からあまんじゃくに代わっていることに注意しておきたい。

ところで、『風土記』の巨人伝説は、全国的に見られる「ダイダラボッチ」という巨人伝説に相当する。巨人の足跡が沼や池になったという話は全国的に数多い。こうしたダイダラボッチの伝説で最もスケールが雄大なのは、滋賀県で伝えられていた琵琶湖と富士山の話であろうか。富士山はダイダラボッチが近江国（おうみのくに＝現在の滋賀県）の土を掘って運んでこしらえた山であり、琵琶湖はその掘られた跡である、という話である。多可郡の伝説も、こうしたダイダラボッチ型の伝説が『風土記』段階の古い形であって、それが後に「天の邪鬼」伝説と結びついたことで今日の姿になっていったのであろう。

こうしたダイダラボッチ型の巨人伝説は、一般的に山への信仰と深い関係があるとされている。多可の場合も、『風土記』の巨人が「ここは高い」と言ったのは、“山が高い”ということであろう。この巨人自体が、山を擬人化したものであるとの理解も示されている。そこまで言い切れるかどうかはともかくとしても、この地域の人が持っていた、周囲の山への信仰が、この伝説を生み出す背景にあったことは確かだろう。

笠形山を登る

神崎郡市川町（かんざきぐんいちかわちょう）・神河町（かみかわちょう）・多可郡多可町の境界に位置する笠形山（かさがたやま）は、別名播磨富士と呼ばれ、笠の形にも見えるきれいな三角形の山頂部は、市川の中流域や多可郡の平野部など、かなり遠くからもその姿を望むことができる。「笠形山」という名前は、京都の愛宕山（あたごやま）からも笠のような山頂が遠望できたところから付けられたという。

山の中腹には笠形神社、麓の登山道入り口近くには笠形寺がある。明治の神仏分離以前には、笠形寺と笠形神社は一体で、現在山の中腹にある神社の境内がお寺の境内でもあった。笠形山のあまんじゃく伝説は、こうした信仰の場となっていた山を舞台とする話である。



笠形山遠望 (右奥の最も高い山、
姫路市船津町から)



笠形山 (市川町上牛尾から)



笠形寺



笠形神社



笠形神社拝殿
(神仏分離以前は笠形寺本堂)

笠形山のあまんじゃくは、多可の谷を挟んで反対側にある妙見山（みょうけんさん）に石の橋を架けようとして失敗した。笠形山には、そのときにあまんじゃくが建てた橋の脚とされる石柱がある。石柱を目指して山を登ってみる。麓の笠形神社大鳥居から歩くこと約1時間40分、途中笠形寺、笠形神社境内を経由する登山道で山頂にたどりついた。



笠形山山頂



笠形山山頂から多可の谷を望む
(右奥の大きな山が妙見山)



あまんじゃくの石柱



あまんじゃくの石柱と
妙見山(中央奥の山)

あまんじゃくの石柱は、そこから多可町八千代区(やちよく)へと降りていく登山道を下ること、およそ200mの地点に立っていた。切り立った岩盤の先に一人ぼつねんと立つこの岩、高さはおおよそ7mとされる。岩の根もととは風化によってえぐりとられていて、いつ倒れてもおかしくない感じもする。自然の力でこうした岩ができたことは確かに不思議だ。背後の岩盤の上からのながめは絶景で、視界の先に妙見山も収めることができた。この石柱については、「あまんじゃくの挽石(ひきいし)」と呼ぶともされているが、参考資料によって呼び方にばらつきがあるので、ここでは単に「石柱」としておく。

また、石柱と山頂との中間地点で少し脇道に入ると、「天狗岩(てんぐいわ)」と呼ばれている岩盤帯がある。地学的に言うと、溶結凝灰岩(ようけつぎょうかいがん)の特徴である板状節理(ばんじょうせつり)が発達した岩盤で、周辺には板状にはがれた石片が多数ころがっている。これを伝説では、あまんじゃくが橋の板にしようとした石であるとしている。こうした石は、一般的には「鉄平石(てっぺいせき)」と呼ばれている。



天狗岩



鉄平石



鉄平石

多可町を訪ねる



多可町中区 妙見山



多可町中区からみた笠形山
(中央奥の最も高い山)

つづいて多可町を訪れた。あまんじゃくは、谷の北端の加美区(かみく)から順に田んぼにお供えを配って歩き、西脇市(にしわきし)との境界にあたる中区曾我井(なかくそがい)まできたところで夜が明けたため逃げ帰ったとされる。地図で見ると、多可町加美区、中区のほとんどがこの伝説の対象となっていることになる。この伝説は、山から降りてくると考えられていた「田の神」と、あまんじゃくと結びついた印象を受ける。

あまんじゃくが橋を架けようとした妙見山は、多可町中区の最高峰で、中区の盆地に立つとほとんどの地点から北正面にそびえる山容を拝むことができる。また、笠形山も、中区の南部では、その山頂部を遠望することができる。多可のあまんじゃく伝説は、こうした地域のシンボルともいえる山々が舞台となっている。やはり、多可のあまんじゃく伝説の背景には、人々の山に対する信仰があると考えてよいだろう。



多可町加美区鳥羽
青玉神社



多可町中区曾我井

また、今回このサイトでは載せなかったが、多可にはほかにもあまんじゃくに関する伝説がある。多可町中区の奥中（おくなか）には、中町中学校の北にある岡山（おかやま）と、南隣の茂利（しげり）にある太子山（たいしやま）とを、あまんじゃくが天秤棒のような石でかついで運んでいこうとして、石が折れてしまって失敗したとの伝説もある。そのときに折れた石棒とされる「あまんじゃくの長石（ながいし）」が、現在奥中公民館前に残されている。



あまんじゃくの長石



岡山



太子山
(茂利では丸山とも呼ぶ)



太子山(手前)と岡山(奥)

この長石は、もともとは少し東側にあたる国道427号線の、奥中交差点近くの用水路の中に埋まっていたが、交差点拡幅工事のために掘り出されて現在地に運ばれたものという。もともとこの石があった地点には、現在はあまんじゃくを描いたイラスト看板が建てられていて、長石も将来的にはこの地点に戻す計画だという。



国道427号線奥中交差点
付近の看板

このほか、あまんじゃくはかんしゃく持ちで、気に入らないことがあると多可の谷に火の雨を降らせたという話もある。そんなとき人々が逃げ込んだのが、中区田野口の妙見山麓にある横穴群であるという。この横穴群とは、古墳時代後期に多く造られた、群集墳（ぐんしゅうふん）と呼ばれる小さな古墳の集まりを指している。現在、田野口の隣、東山地区内にある群集墳が写真のように整備されている。これらは6世紀末～7世紀にかけて造られていったもので、それぞれの古墳ごとに、棺を入れる石室が横向きに口を開けている。



東山古墳群



東山一号墳の石室

この話のあまんじゃくは少々怖い。明らかに人間に害を及ぼしている。この話は、大正12（1923）年に刊行された『多可郡誌』に載せられている。

天の邪鬼とダイダラボッチ

さて、多可のあまんじゃくから離れて、一般的な「天の邪鬼」の伝説としては、瓜子姫（うりこひめ）の昔話がよく知られている。瓜から生まれた瓜子姫に天の邪鬼が近寄り、いたずらをしたり食い殺してしまったりするが、最後は正体がばれて殺される、などとする筋が一般的で、兵庫県域でも香美町（かみちょう）などで見られる。瓜子姫の昔話に出てくる天の邪鬼は、どちらかという体が小さいイメージがある。しかし、多可の伝説はこれとは異なり、巨人のイメージである。

多可のあまんじゃくは、やはり瓜子姫の昔話ではなく、ダイダラボッチ伝説と縁が深い。たとえば、遠く離れたところへ山を運ぶ、といった話は、ダイダラボッチなどの巨人を主人公とする話として、全国的に確認できる。

先に述べた富士山と琵琶湖の話もその一つだが、多可に近いところで見れば、隣の丹波国氷上郡（たんばのくにひかみぐん＝現在の丹波市）では、鬼が山を運んだという伝説がある。ある時大きな鬼が、現在の丹波市役所の裏にある甲賀山（こうがやま）と、その南にある犬岡山（いぬおかやま）とを、大きな棒でかついで運んでいた。しかし、現在の丹波市成松（なりまつ）あたりまで来たところ、泥田が多く歩きにくくて疲れてしまったため、そのまま山を置いて帰ったという。多可の岡山と太子山の話とそっくりである。氷上では、いつの間にか話の主役が巨人から鬼に入れかわったようだ。



甲賀山

伝説の世界では、このように主役が入れかわっていくことがよく見られる。そうした点を念頭に置くと興味深いのが、新潟県や鳥取県に伝わる神の橋架け伝説である。新潟県の話は、むかし、「羅石明神」という神が、越後国（えちごのくに＝現在の新潟県）から佐渡島（さどがしま＝現在の新潟県佐渡市）へ橋を架けようとしたところ、天の邪鬼が鶏の鳴きまねをしたために、神が逃げ帰り、橋はできなかった、との話である。鳥取県の話も、橋を架けようとした場所が越後国と佐渡島から、因幡国（いなばのくに＝現在の鳥取県東部）から隠岐国（おきのくに＝現在の島根県隠岐諸島）へと変わり、神の名前が「御熊の神」に変わっているものの、あとは同様の筋のものである。



犬岡山

こうした橋架け伝説は、笠形山から妙見山に橋を架けようとしたという、あまんじゃく伝説とよく似ている。笠形山の橋架け伝説も、もともとうした神の橋架け伝説が、いつしか邪魔者役だったあまんじゃくを主人公とする話に変わっていったものなのではないか。くりかえし述べているように、多可のあまんじゃく伝説には、『風土記』の巨人伝説を含めて、全体的に山への信仰との深い関係がうかがえる。この地域には、古い段階では、山の神に関するさまざまな伝説があり、それが歴史の中で変化を遂げて、現在のあまんじゃく伝説になっていったのではないかと考えられるのである。

篠ヶ峰の鬼

もうひとつ、伝説「篠ヶ峰の鬼 のんきな鬼のお手伝い」では、多可のあまんじゃくとよく似たキャラクターの鬼を紹介した。この鬼もおちょこちょいであるところはよく似ているが、最後には人々のためになることをして天に去っていく。鬼というよりは神に近い性格が感じられる。

話の内容は、牧山（まきやま）の里（丹波市山南町小畑付近）を流れる牧山川の水量が少ないことや、船城（ふなき）の里（丹波市春日町西部）にかつては湿田（しつでん＝水はけの悪い田）が多かったこと、牧山周辺がかつては養蚕（ようさん）や栗の名産地であったことなど、地域の特徴を鬼の行いによって説明しようとするものである。



鬼（『北斎漫画』）



牧山川



牧山神社



船城の里
(丹波市春日町野山付近)

鬼は、古くからしばしば説話に登場するが、たとえば平安時代など古い段階の鬼は人を捕って食うきわめて恐ろしい存在であった。この伝説のように神に近く、しかも人間的なひょうきんさを兼ねそなえた性格の鬼は、かなり新しい時代に作られた印象を受ける。丹波市は多可町の東隣にあたるので、篠ヶ峰の鬼にも多可のあまんじゃくの性格が影響しているのかもしれない。

舞台となる篠ヶ峰は、播磨の多可郡と丹波の氷上郡の境界にそびえる山で、氷上郡内では最高峰である。この話を伝えていた牧山の里は篠ヶ峰南麓にあり、この鬼伝説とは別に弘法大師（こうぼうだいし）に関する伝説が二つ伝えられている。

一つは、篠ヶ峰山頂付近の岩が牛になって夜な夜な田畑を荒らし回って困っていたところ、弘法大師が法力（ほうりき）でこれを封じ込めたというものである。もう一つは、弘法大師が村にやってきて1杯の水を求めたところ、村人が水をあげなかったために、それから牧山川の水量が少なくなったという伝説である。後者は、篠ヶ峰の鬼の話と共通し、地域の自然を説明する伝説となっている。

この篠ヶ峰も古来神仏のいる山であった。西麓に位置する多可町加美区丹治（たんじ）には、古く篠ヶ峰に丹治大明神が鎮座していたという伝説がある。しかし、あるとき大明神は北麓の丹波市氷上町三原（ひかみちょうみはら）へ飛んでいってしまい、西麓の丹治へは大明神とともにまつられていた文殊菩薩（もんじゅぼさつ）がやってきたという。篠ヶ峰山上に鎮座していたという丹治大明神と文殊菩薩とは、伝説上の高僧である法道仙人（ほうどうせんじん）が開いた寺院を指しているという。

また、大明神が飛んでいったとされる三原の内尾神社（うちおじんじゃ）にも、やはり祭神は丹治の大登ヶ峰（おおのぼりがみね）から移ってきたという伝説が残されている。この鬼には、篠ヶ峰を拠点に活動していた修験者（しゅげんじゃ）の姿が投影されるとも考えられている。篠ヶ峰の鬼の伝説も、多可のあまんじゃくと同様に、こうした山に対する信仰を背景としているようだ。



内尾神社



篠ヶ峰
(多可町加美区丹治より)

用語解説

【『播磨国風土記』】はりまのくにふどき

律令国家（りつりょうこっか）の命令によって編纂された古代播磨の地理書。霊亀元（715）年前後に編纂されたものと見られている。現存するものは、三条西家（さんじょうにしけ）に所蔵されていた古写本で、巻首の赤石（明石＝あかし）郡の全部、賀古（加古＝かこ）郡冒頭の一部と、巻末の赤穂郡（あこうぐん）の全部の記載が欠落している。活字化されたものは、日本古典文学大系新装版『風土記』（秋本吉郎校注、岩波書店、1993年）のほか、全文を読み下した、東洋文庫145『風土記』（吉野裕訳、平凡社、1969年）などがある。

【『峰相記』】みねあいき

峰相山鶏足寺（みねあいさんけいそくじ＝現在の姫路市石倉の峰相山山頂付近にあった寺）の僧侶が著した中世播磨の宗教・地理・歴史を記した書物。原本は本文冒頭の記述から貞和4（1348）年ごろに成立したと考えられる。現存する最善本は揖保郡太子町（いぼぐんたいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に伝わる写本で、奥書から永正8（1511）年2月7日に書写山別院（しよしゃざんべついん）の定願寺（じょうがんじ）で写されたものであることがわかる。活字化されたものは、『兵庫県史』史料編中世4（兵庫県史編集専門委員会、1989年）や、全文口語訳をした、西川卓男『口語訳『峰相記』 中世の播磨を読む』（播磨学研究所、2002年）などがある。

【溶結凝灰岩】ようけつぎょうかいがん

火山の噴火による噴出物が、地上に堆積したときに、自らが持つ熱と重さによって溶けて圧縮されることによつてできる岩石。

【板状節理】ばんじょうせつり

岩石の中の割れ目が平行に発達し、割れた岩塊が板状に見えるもの。ここで出てくる溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）のような火成岩の場合、マグマが冷える時に形成されると考えられている。

【群集墳】ぐんしゅうふん

5世紀後半以降に造られるようになった、小規模な古墳が密集したもの。円墳や方墳によって構成されるものが多い、7世紀ごろまで造られ続けた。こうした古墳群の発生の背景としては、限られた首長のみから、その一族の人々を含めるようになるなど、古墳を造営できる人々の範囲が広がったためと見られている。

【弘法大師空海】こうぼうだいしこうかい

774 - 835。日本に真言密教（しんごんみつきょう）をもたらした平安時代初めの僧侶。同じ時期に天台宗をもたらした伝教大師最澄（でんぎょうだいしさいちょう）とならんで、この時期の日本仏教を代表する人物。延暦23（804）年遣唐使留学僧として入唐。長安（ちょうあん）青龍寺の恵果（えか、「けいか」とも言う）に真言密教を学ぶ。大同元（806）年帰国。弘仁7（816）年朝廷より高野山に金剛峰寺（こんごうぶじ）を開くことを許される。弘仁14（823）年朝廷より東寺（とうじ）を与えられ、真言密教の道場とした。承和2（835）年死去。延喜21（921）年、朝廷から弘法大師の諡号（しごう、死後の贈り名）が与えられた。

用語解説

【法道仙人】ほうどうせんにな

奈良時代に活躍したとされる伝説上の宗教者。インドの生まれとされ、主に播磨から丹波南部、但馬南部、摂津西部にかけて法道が開いたとの伝承を持つ寺院が多数存在する。

その伝承の中心は加西市の一乗寺（いちじょうじ）にあったと見られる。あるとき布施（ふせ）を乞うために、法道が瀬戸内海を行く船に鉢を飛ばしたところ、船頭が積荷は官庫に納めるためのものなので与えられないと断ったところ、船の米俵が次々とひとりでに一乗寺を目指して飛んで行ってしまった。船頭が許しを請うと、法道は俵を飛ばして船に返したが、1俵だけ途中で落ちてしまった。そこで、この俵が落ちたところを米墮（よねだ = 現在の加古川市米田町）と呼ぶようになった、という伝説がよく知られている。

こうした伝説には、長谷寺（はせでら）の徳道（とくどう）や、信貴山縁起絵巻（しぎさんえんぎえまき）に登場する命蓮（みょうれん）などの説話の影響が考えられている。法道伝説は、こうした中央で成立した説話を参考に作り出され、地域限定的に広まったものと見られているのである。こうした法道伝説とよく似た、地域に特徴的な宗教者伝説としては、備前（びぜん = 現在の岡山県東部）を中心に広がる報恩大師（ほうおんだいし）伝説などがある。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
日本伝説 播磨の巻	1918 (1978復刻)	編著: 藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会
兵庫の民話(日本の民話 25)	1960	編集: 宮崎修二郎、徳山静子	未来社
郷土の民話 丹有編	1972	編集: "郷土の民話"丹有地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 東播編	1972	編集: "郷土の民話"東播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
郷土の民話 中播編	1973	編集: "郷土の民話"中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
兵庫の伝説	1980	編著: 兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
兵庫の伝説 1	1981	編集: 有井基、絵: のざきジョー	神文書院

参考書籍

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨国風土記(収録:日本古典文学大系新装版『風土記』)	1993	校注:秋本吉郎	岩波書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
日本伝説集	1913 (1973復刊)	高木敏雄	郷土研究社(復刊:宝文館出版)
多可郡誌	1923 (1985復刻)	編纂:兵庫県多可郡教育会	兵庫県多可郡教育会(復刻:臨川書店)
丹波氷上郡誌 上	1927 (1985復刻)	編纂:丹波史談会	臨川書店(復刻)
丹波氷上郡誌 下	1927 (1985復刻)	編纂:丹波史談会	臨川書店(復刻)
郷土誌	1931 (謄写版)	編集:和田尋常高等小学校	兵庫県氷上郡和田村和田尋常高等小学校
神崎郡誌	1942 (1976復刻)	編集:兵庫県神崎郡教育会	兵庫県神崎郡教育会(復刻:神崎郡誌刊行会)
丹波志 氷上郡之部	1955	編集:氷上文化協会	氷上文化協会
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
一つ目小僧その他(収録:『定本柳田國男集』5)	1962	柳田國男	筑摩書房
桃太郎の誕生(収録:『定本柳田國男集』8)	1962	柳田國男	筑摩書房
日本物語通観 16 兵庫	1978	責任編集:稲田浩二、小沢俊夫	同朋舎
日本の伝説 43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎、足立巻一	角川書店
日本伝説大系 3 南奥羽・越後編	1982	編集:野村純一	みずうみ書房
かんざき夜話 史話と民話	1987	編集:神崎町文化協会郷土史研究部会	神崎町文化協会
日本伝説大系 8 北近畿編	1988	編集:福田晃	みずうみ書房
兵庫丹波の山 上	1991	慶佐次盛一	ナカニシヤ出版
播磨 山の地名を歩く	2001	編集:播磨地名研究会	ひめしん文化会、神戸新聞総合出版センター
中町文化財報告30 中町の遺跡 2	2004	編集:中町教育委員会	兵庫県多可郡中町教育委員会
丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし 5	2005	編集:「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)丹波の森協会

その他の参考資料

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨富士を楽しもう 県立自然公園 笠形山(観光パンフレット)	不詳	編集:市川町観光協会	市川町観光協会

所在地リスト



氷上・船城	丹波市氷上町成松、丹波市春日町野山
多可町中区	多可町中区
篠ヶ峰	丹波市山南町、丹波市氷上町、多可町加美区
笠形山	市川町上牛尾

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日